拝啓　今年も早や5月末となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。近所の公園では、ブタクサやシロツメ草など雑草が、「栄華を極めた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった」という聖書の言葉を思い出させるほど、きれいに咲いています。木の花では、ヤマボウシが真っ白な花を咲かせています。コロナ・ウイルスの蔓延で、日本でも医療崩壊が起きるのではないかを心配していましたが、急速に新規患者が減りました。しかし緊急事態宣言が終了しても、これから先も感染しないように、できるだけの注意が必要でしょう。

今回は佐生健光さんの『キリスト教と称名』の第3回です。

5ページの「仰ぐことと称えること」には、次のように書かれています。

「　へばりついて居よ

称名はすべての思考を一時中止して、主の御名を称える。それだけである。念仏を信ぜん人は、たとひ一代の法をよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無知のともがらに同じて、智者の振舞をせずして、ただ一向に念仏すべし（法然上人・一枚起請文より）

親鸞にをきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。念仏は、まことに浄土にむまるるたねにてやはんべるらん、また地獄に堕つべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり（歎異抄より）」

佐生さんは、法然上人の一枚起請文を引用して、「ただ一向に念仏すべし」という言葉、また親鸞聖人の「歎異抄」を引いて、「よき人のおほせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」という言葉を紹介されています。

「念仏」という行と先生の教えを信ずることが強調されています。これは、日本民族が長い年月をかけて学んだ仏教の受け方であると思います。その仏教の受け方の核心を小西先生は、キリスト教に取り入れました。取り入れたというより、同じことが、聖書に書かれているということを発見されました。「わが主イエスよ」と呼ぶ行を強調されました。

小西先生は、よく「聖書はお経じゃ」と言われました。お経の一句を大事にして、念仏するというのは、仏教浄土門のお経の学び方だと思いますが、その点も学ばれました。

キリスト教の信仰に入るために先生をもっている人は幸せだと思います。また、佐生さんにとって、小西先生と出会うために樫根英郎さんがおられたように、信仰の先生に出会うために紹介する人がある、という事も重要であるように思います。

私も、佐生さんと同じように、小西先生と出会えたことを我が人生で最高の幸せであったと思っています。小西先生に出会うために、大学時代の友人阿部達雄君という親友がいました。小西先生は、パウロを紹介されます。パウロは、イエスを紹介されます。

皆様も、皆さまもお身体ご自愛され、お過ごしくださいますように。

5月25日　　山口周三

エンカウンターの読者各位